教育実践研究　第30集（2020）103－108

［生　活］

身近な生活に関わる「見方・考え方」を生かした地域から学ぶ生活科を目指して

－２年生生活科「刈羽の宝　大はっけん」の実践を通して－

青木　律子*

1　主題設定の理由

平成27年12月に取りまとめられた中央教育審議会答申「新しい時代の教育と地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」を踏まえ，学校運営協議会の設置の努力義務化やその役割の充実などを内容とする，「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」（以下「地教行法」）の改正が行われ，平成29年４月１日施行された[1)]。刈羽村においては，「地教行法」の改正に先だって，平成26年度から「刈羽コミュニティ・スクール」を導入し，刈羽小・中学校と刈羽村教育委員会が一体となって，「地域とともにある学校づくり」を推進してきた。その中でも，小・中学校の教育活動を地域の方々と協力して進めるために，地域コーディネーターが重要な役割を果たしてきた。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　生活編』では，社会に開かれた教育課程やカリキュラム・マネジメントの意識を高めることが求められている[2)]。身近な刈羽村での生活における人々，社会及び自然などの対象と自分がどのように関わっているのかという視点に立ち，自分自身や自分の生活について考えていく考え方を生かして，自立し生活を豊かにしていく資質・能力を育成するものと示している。

令和元年度の「刈羽村子ども教育基本計画」の「子どもに身に付けさせたいこと」として，「①基礎・基本を身に付け，自分の力で解決しようとする。②相手の気持ちを理解し，積極的に人間関係を築く。③社会のルールを守り，役割や責任を果たす。④夢や向上心をもち，目標に向かって努力する。⑤「ふるさと刈羽村」を愛し，地域や社会のために行動する。」の５点が挙げられている[3)]。

上記のことを踏まえ，地域に出て様々な価値観や背景をもつ人々と関わり合う活動を「刈羽コミュニティ･スクール」の取組として位置付けることで，これから訪れる超スマート社会で生き抜く力となるコミュニケーション力を育て，高められると考えた。

身近な人々と関わる活動を通して，子どもがふるさとである刈羽村の人々や社会及び自然と関わる中で，自分たちの生活が成り立っていることに気付き，それらに親しみや愛着をもたせる指導により，自らふるさとのためによりよい生活を創り出すと考え，本研究主題を設定した。

2　研究の目的

加藤(2009)は[4)]，インタビュー調査で得た，都市部における児童が「地域への愛着」の基盤を築くために６つの視点を取り入れた授業実践を行った。実践より，「日常生活においても地域に出掛けるようになった」と振り返っている。山本，加納(2016)は[5)]，「地域への愛着」形成過程における「地域への肯定的な印象」を形成する段階とそれを支える「人とのかかわり」と「くり返しかかわること」の存在を明らかにした。これらの研究より，地域探検を通して「地域への愛着」をもたせていることが分かる。

本研究では，自ら関わり，自分自身の生活を豊かにするために，児童が既にもっている見方・考え方を発揮する「町探検」の学習を取り入れて，主体的に働きかける児童を目指した。

本研究の対象学年は，昨年からの持ち上がりである２学年（全49名）である。素直で明るく，大人の言うことをよく聞く。しかし，子どもたちを大切に育てている村の方針もあり，各地区に公園があったり，みんなで集まれる公共施設があったりする手厚い環境から，自分から欲しいものを求めたり，行動したりする意識は薄い。普段の生活でも，自分が知っている人には進んで挨拶や話をすることはできるが，それ以外の社会や地域に出るとできない子どもたちが多い。

*刈羽村立刈羽小学校

また，２学年の生活科で大きな割合で示されている「町探検」が当校の指導計画表を見直すと，７～８月に学校周辺の「町探検」に位置付けられており，１回のみの探検であった。また，８月は夏休み中であり，１回だけでは，十分な体験ができる計画ではないと分かる。

そこで，「町探検」に重きを置いた指導計画表に改善し，学校周辺の「町探検」を通して，刈羽村に住む身近な人々，社会及び自然と関わる活動において以下の点を目標とする活動を計画することにした。

⑴　刈羽村の人々や場所に親しみや愛着を培うことができる。

⑵　刈羽村のために働きかけてよりよい生活を創造しようとする態度を養うことができる。

３　研究の方法

⑴　地域コーディネーターとともに，身近な人々との関わりを重視した「町探検」に変更した指導計画表を作成する。

⑵　活動や体験を通して，自分自身や身近な人々，自分のまわりの社会のよさや関わりに気付く単元を構成する。

⑶　具体的な活動を通して，気付いた点を児童間で振り返りを行い「深い学び」になる授業の改善に取り組む。

４　研究の実際

⑴　地域コーディネーターとともに，身近な人々との関わりを重視した「町探検」に変更した年間指導計画を作成する。

平成29年告示の学習指導要領の「生活編」の第５章指導計画の作成と学習指導には，「児童中心の学習を進めていくには，特に以下の三つのことに配慮する必要がある。」と記述されている[2)]。そこで，次の３点に焦点を当てて，指導計画の見直しをした。

①　具体的な活動や体験が十分にできる時間を保障するために，野菜の苗植えが終わり，ザリガニ釣りまでの間の５月に，「町探検Ⅰ」を取り入れた。

②　主体的な活動の広がりや深まりを可能にするために，様々な人や事象と触れ合えるよう，探検を２回実施したり，休日の宿題に出したりした。

③　学習の対象にじっくりと安心して関わることのできる心理的な余裕をもたせるために，「かりわの町発表会」を９月に取り入れた。９月は，学校行事があまりないため，落ち着いて取り組むことができるからである。

表１　H30年度　生活科学習の指導計画表

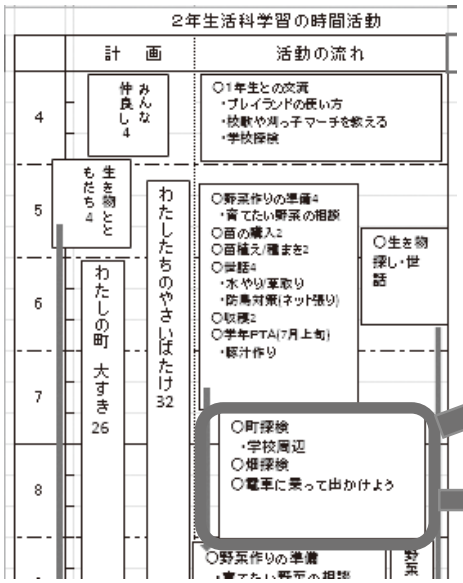
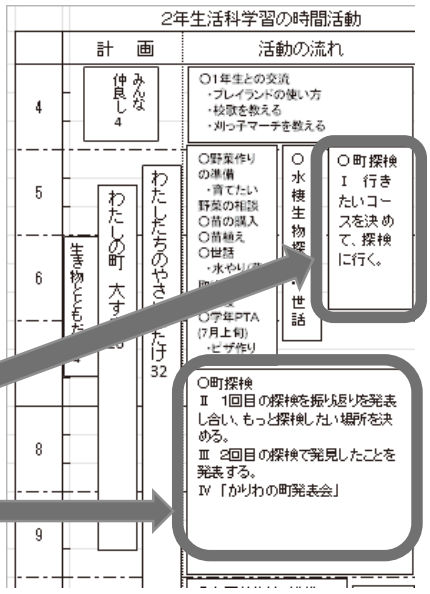


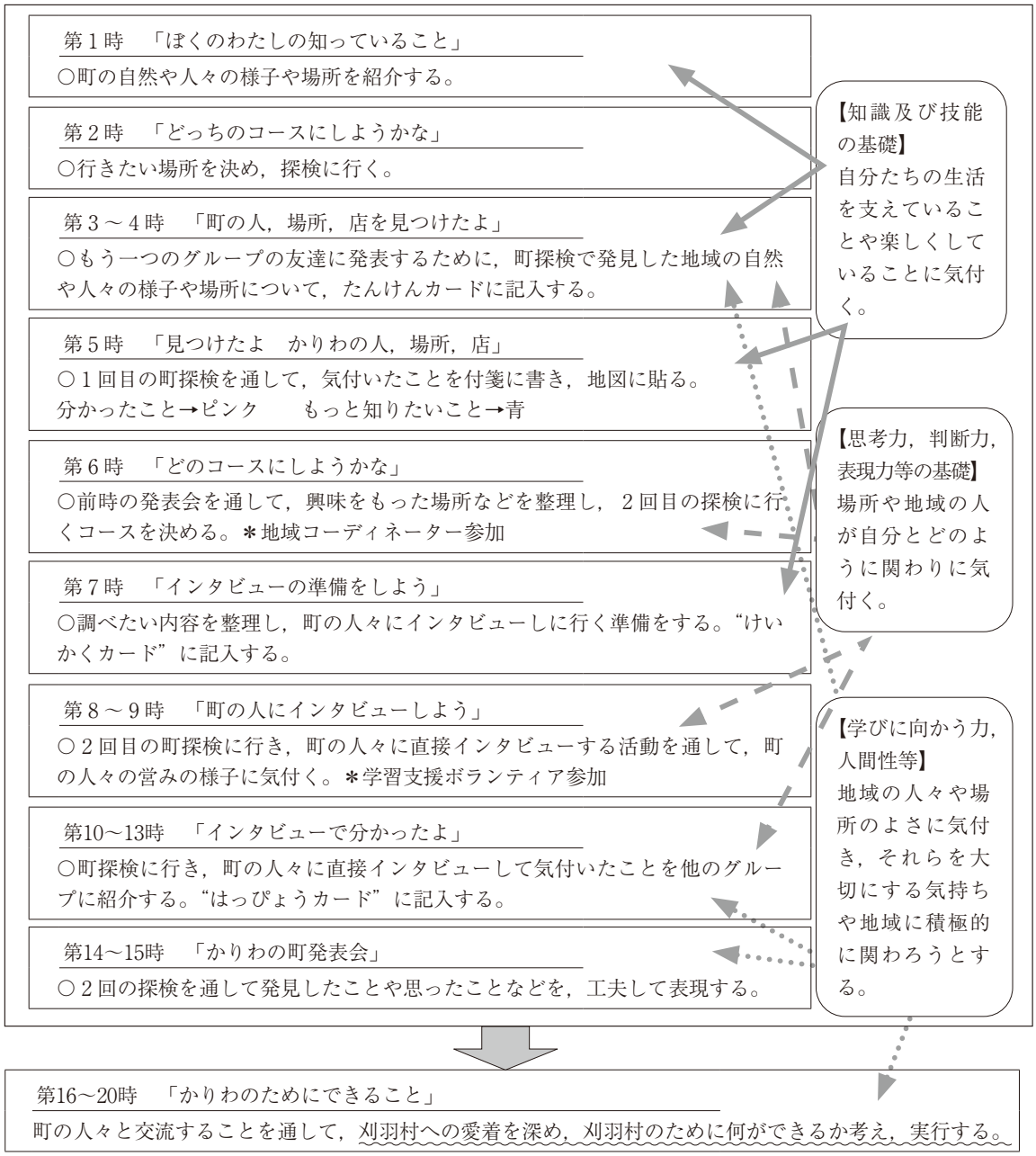
表２　R元年度　生活科学習の指導計画表



⑵　活動や体験を通して，自分自身や身近な人々，自分のまわりの社会のよさや関わりに気付く単元を構成する。

子どもの思いや願いをはぐくみ，意欲や主体性を高める活動にするためには，まず教師がよく地域を知らなければならない。そこで，本実践では，地域のことや村の人々のことをよく知っている地域コーディネーターと一緒に指導計画を作成した。公共施設のみならず，刈羽村で働く人々がどんな思いでどんなことを考えながら働いているのかを直接触れることができる身近な店を中心に候補として挙げてもらうことができた。

表３　「町探検」の指導計画



⑶　具体的な活動を通して，気付いた点を児童間で振り返りを行い「深い学び」になる授業の改善に取り組む。

①　町探検後の振り返りを通して，自身の学びや変容に気付くことができた。

町探検で実際に見てきたことや聞いてきたことを言葉などで，振り返ることによって，自分の中で気付きが明確になると考える。本実践においても，探検後に同じコースに行ったグループ同士でどんなことに気付いたのか話し合い，たんけんカードに記入した。対話を通して，「私も同じことを思ったよ」「それは分からなかった，すごいね」などと声を掛け合う姿があった。

②　「人に」に焦点を当てることで，キャリア教育の充実が図られた。

刈羽村には，「ラピカ」などの公共施設やスーパーセンター「プラント５」がある。こういった場所だけを見るのではなく，その中で働く人々，刈羽村のためにお店を出した人々に焦点を当てるために，どんな人がいたのか校区地図に写真を貼ることにした。これは，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けるキャリア教育につながるものである。さらに，インタビューを通して，直接話す機会を多く当てた。直接話すことでその人の思いや

考えに触れることができた。

③　中学年以降の社会科へのつながりを考え，校区の地図を使用した。

刈羽小学校の３学年の総合的な学習の時間には，村全体の探検が行われる。そこで，使用する校区地図（写真１）を生活科での「町探検」でも使い，学校周辺にはどんな建物があるのか空間的に身の回りの地域を理解できるものと考える。１回目の探検では，地図を上下左右に動かしながら，場所を把握する子どもたちだったが，学校と国道116号が分かると自分の位置を確認できるようになった。地図の活用を通して，社会科で求められている位置や空間的な広がりを知ることができ，社会的事象の見方・考え方につながりをもつことができた。

写真１

④　学校と地域が協働で学習活動を展開するために，地域コーディネーターと授業を作った。

町探検で気付いたことをまとめ，地域コーディネーターと子どもたちの興味や関心がどの場所に向いているのかを話し合った。２回目の探検のコースを決めるときに地域コーディネーターも授業に参加していただき，子どもたちは疑問を直接聞いたり，自分が見たものがどこにあるのか確認したりしていた（写真２）。

写真２

５　研究の成果

⑴　刈羽村の人々や場所に親しみや愛着を培うことができた。

①　町探検を通して，親しみや愛着を培うことができた。

普段何気なく通っている通学路脇にある石像があった。神社や寺でもない，普通の家の庭にあった。そのことをずっと不思議に思っていた児童が，訪問し質問してきた。その石造は「七福神の一人である布袋様」と知った。円満な人格，また富貴繁栄を望んでいる家人に親しみをもつことができた。

蕎麦屋「一休庵」がある。こちらの店主は東京のホテルで修業していた後，刈羽村で開業した。インタビューを通して，「刈羽村の人のために美味しい蕎麦を出したい」と店主の思いを確認することができた（写真３）。

写真３

平成19年に発生した中越沖地震で閉店したスーパーセンター「プラント５」が，刈羽村の人の要望や刈羽村村長と話し合い，再開するいきさつを店長から聞くことができた。これまで，新聞や家の人の会話だけで周知していたと思うが，直接聞くことで，店を再開するまでの大変さや苦労を知り，店の人や刈羽村村長の刈羽村の人への熱い思いを感じ，感動していた。

飲食店である「四季彩」は，刈羽村には食べる店が少ないことから開店したことや座ることが辛いお客さんのために床を板張りにし，椅子とテーブルの様式に改築したことを知った。インタビューした児童はその後の振り返りで「店の人は，お客さんのことを考えて，優しいと思った」と記入していた。

このように，繰り返し探検をすることで，１回目の探検で「あれ？何だろう」を生み出し，２回目の探検への意欲になった。自分で行きたい場所を選んだ２回目の探検では，児童の「知りたい」が，主体的な原動力となった。

普段，ただ前を通り過ぎるだけの店に直接入ることができ，どんな仕事をしている店なのか，分かる喜びがあった。どんなことを聞こうか，どのような部屋があるのか興味をもち，進んでインタビューする児童の姿があった（写真４）。

写真４

また，休日の宿題を通して，授業で訪れたことのない場所に行って調べたり，何気なく買い物に行っていたスーパーマーケットで働く人が何をしているのか見たりして，地域に目的をもって出掛けた児童がいた。

刈羽村の人やそこで働く人々がどのような思いで仕事をし，住んでいるのか知ることで，「刈羽村への愛着」が深まったと考えられる。

② 町発表会を通して，刈羽村への親しみや愛着を培うことができた。

グループごとに探検で分かったことの発表会を行った（写真５）。児童の要望から，探検でお世話になった家や店の人，保護者や探検に同行してくれたボランティアの人などを招待して行った。全員で聞き合い，質問し合うことで，今まで，自分が知っている「刈羽村」の領域が広がり，これまでの見方・考え方を変えて，自分たちが住む刈羽村を見るようになった。発表会後の振り返りカードに，次のような記述があった。

写真５

児童Ａ
一休庵は，こなをこねてのばして切って，ゆでるしごとを一人でしていて，たくさんはたらいている。つかれないのかな。

児童Ｂ
プラントにはしょうひんが，21万こもあって，びっくりしました。そして，2000人をこえる人がはたらいているとは知りませんでした。

児童Ｃ
四きさいさんは，夏にぴったりのりょうりを考えていました。きせつとおきゃくさんのことを思っているんだな。店の名前にぴったり。

⑵ 刈羽村のために働きかけてよりよい生活を創造しようとする態度を養うことができた。

① 刈羽村で働く人々の思いに寄り添い，気付きの質が高まった。

発表会後に町探検のまとめをした（写真６）。探検で見付けた刈羽村で働く人々に焦点を当てて，刈羽村の人たちは一体何を思って働いているのかを考えた。インタビューや探検で得た知識から，「刈羽村の人たちのためにがんばっているんだ」そして，「刈羽村の人たちを大切にしている」とほぼ全ての児童が発言した。そこで，「刈羽村の人たち」つまり「自分たち」であることに気付いた。自分たちが，刈羽村の一人として，多くの人たちから見守られて，大切にされていることが分かり，「嬉しい」「ありがたい」「親切にされている」と思いをもつことができた。

写真６

② 日常生活を振り返ることで，「見方・考え方」の育成につながった。

①から自分たちが刈羽村の人たちから大切にされていて，「刈羽村の宝」のように思っている児童に，刈羽村の大人が子どもたちのことをどう思っているかを聞く活動を設定した。大切にされること，してもらうことを当たり前に感じている子どもたちに，自分自身も刈羽村の一人として，すべきことがあることに気付き，働きかけてほしいと思ったからである。

写真７

まずは，刈羽村生涯センター「ラピカ」の職員２人と地域コーディネーターから話を聞いた（写真７）。多くの子どもたちが利用していることに感謝をしており，子どもたちのためにイベントを考えることが楽しいという言葉で，子どもたちは笑顔になった。しかし，ラピカの使い方について話を聞くと，施設を利用している大人たちが困っている話も出てきた。図書館で大声を出したり，走っていたりする人がいて，来館しているほかの利用者の迷惑になっていること。ラピカに自分のゲーム機を持ってきてはいけないというきまりなのに持ってきて，勝手に充電をしている人がいること。コンセントには，使えないようにカバーをつけているにもかかわらず，そのカバーを外している人がいること。他にもトイレの使い方やプール後の持ち物の間違えなど，きまりを守ったり，確認したりして，子どもたちもほかの人にも気持ちよく利用して欲しいということだった。

次に，地域コーディネーターからは，下校の様子が賑やかで，楽しそうに歩いていて自分も元気がもらえるが，歩道の縁石ブロックに上がっていたり，道路近くを歩いていたりしていて，車に跳ねられるのではないかとハラハラするし，危険だ。そして，バスの運転手さんからは，シートベルトを付けない人がいること。バスが動いている時に立っている

人がいるので，危なくて心配だということなどの話だった。

話を聞きながら，児童たちは自分と対話をし，おかしいと思い始めた。それは，刈羽村の人たちから大切にされている自分たちが，みんなが使うものを大切にしていないことやきまりを守っていないことへの気付きとなり，自分自身を見つめることにつながった。

児童D
せっかく刈羽村の子どもたちを大切にしてくれるのに，刈羽村の大人の方がおかしいなという気もちになってしまうので，これからずっと子どもたちはルールをまもることに気をつけたらいいと思います。

児童E
ぼくたちは，じつはいけないことをしていると知りました。いけないことをしないように気をつけます。刈羽小学校のみんなに気をつけてほしいです。

児童F
刈羽村の人たちは，わたしたちのことを考えてくださっているのに，わたしたちはおんがえしできなくて，めいわくもかけていて，もうしわけないなと思っています。

③　「にじいろさくせん」を通して，学びに向かう力の育成になった。

刈羽村の大人たちの話から気付いたことを，他の学年の子どもたちにも伝えなければと考えた子どもたちは，どの方法で刈羽小学校のみんなに伝えられるか，対話を通して考えた。チラシや手紙を書いて配る方法やラピカのコンセントに「抜いちゃだめ」と書いたシールを貼る方法やポスターを貼る方法が挙がった。しかし，ポスターをただ貼るだけでは効果がないという意見に対して，更に考える児童がいた。「ぼくたちの写真を載せてみたらどうだろう」の意見に大いなる賛同を得て，それぞれの作戦を主体的に実践していた。

地域コーディネーターとともに指導計画表を見直し，授業時間に行った２回の探検と休日の宿題での町探検を繰り返すことで，様々な場所に目を向けることや刈羽村の人々と関わりをもつことができた。このような探検を通して，見方・考え方が豊かになり，自分から働きかける原動力となった。そして，大発見した数々の刈羽村の宝から，自分自身が村の宝であることの喜びを感じ，刈羽村が安心して生活できる素敵な地域であると愛着が深まった。また，人との関わりを通し，これまでの自分の在り方を見つめ直すきっかけを得て，してもらうだけではなく，自ら気持ちよく生活できるように施設での振舞い方や刈羽村の人たちとの接し方を改善していく姿が日に日に増していることは大きな成果だった。

このような地域に関わる活動を通して，場所や生活したり働いたりしている人々について考えることができた。このことで，３学年からの社会科における社会的事象等の見方や考え方につながる学びにもなった。人から学べる人になるために，学習や経験を元に主体的に活動していた児童たちは達成感にあふれていた。

６　今後の課題

子どもたちが刈羽村への愛着を深め，働きかけていくために，繰り返し対象に関わることが大切である。町探検以外の生活科をはじめ，他の教科や総合的な学習，キャリア教育，児童会活動など，様々な学習や活動で繰り返し刈羽村の場所や人との関わりをもつことによって，より一層愛着を深め，刈羽村のために働きかけようとする態度を持続させていく必要がある。そのために，学年に応じた地域と関連した「見方・考え方」を生かした学習の単元構想をしていく。

また，本実践のように教師だけでは成しえなかった授業構想や訪問場所への渉外，探検時の安全確保等，地域との連携をどう持つか。より充実した活動に向け，コミュニティ・スクールの在り方を考えていかなければならないと考える。

引用・参考文献

1）文部科学省『地方教育行政の組織及び運営に関する法律』（第47条の６）条文解説　2017年改正
2）文部科学省『学習指導要領（平成29年告示）解説　生活科』2018年
3）刈羽村村子ども教育の基本計画　2019年
4）加藤亜美『「地域への愛着」の基盤を築く生活科学習－都市部における第２学年「秋の町探検」の授業実践を通して－』愛知県教育大学大学院　教育学研究科　2010年
5）山本銀兵，加納誠司『「地域への愛着」形成過程に関する一考察－「町探検」の実践分析を通して－』2016年